

### 13 上顎骨の骨延長法に際し、高気圧酸素治療(HBO)を適用した1症例

辻 美千子<sup>1)</sup> 馬場祥行<sup>1)</sup> 本田 綾<sup>1)</sup>  
柳下和慶<sup>2)</sup> 山見信夫<sup>2)</sup> 眞野喜洋<sup>2)</sup>  
鈴木聖一<sup>1)</sup> 森山啓司<sup>1)</sup>

- 1) 東京医科歯科大学顎顔面矯正学分野
- 2) 東京医科歯科大学医学部附属病院高気圧治療部

【目的】近年、上顎骨の劣成長を呈する患者に対し骨延長法が適用されており、良好な結果が得られている。しかし通常は、延長終了後の保定のために頭部の延長装置をしばらく継続して装着する必要があり、患者は長期の入院を余儀なくされる。一方、延長後の後戻りに関しては、これを最小限にするための様々な改善がなされている。今回我々は、上顎正中の著しい偏位を伴う反対咬合を呈する口唇口蓋裂症例に、骨延長法を適用し、3本の牽引ワイヤーに異なる牽引力を作用させることにより、正中の改善を試み良好な結果を得た。さらに治癒促進を目的として、HBOを適用したので、症例を紹介し、その予後について検討する。

【症例】左側口唇口蓋裂の女性。上顎正中の左側偏位および反対咬合の改善のため、32歳時にhalo型骨延長法による上顎骨骨延長法を施行した。3方向の牽引ワイヤーにより上顎の移動を行い、併せて延長中の牽引力を超小型センサにより測定した。延長終了時よりHBOを開始し、週5回2週間施行した。HBO終了同日、3本のワイヤーの牽引力は2.1 N~3.0 Nとなり、延長装置の撤去は可能と判断した。これは通常の保定期間に比べて1週間の短縮となった。現在術後1年を経過し、咬合は安定している。

【結論および考察】延長装置の装着期間の短縮が、患者の負担軽減につながった。また、牽引力の測定は延長装置の撤去時期およびHBOの効果の目安となる可能性が示唆された。

### 14 高気圧酸素療法を併用して治療した下顎骨骨髓炎の臨床的検討

松本 章 吉田将垂 近藤英司 谷 和俊  
山岸陸季 樋渡卓哉 竹川政範 松田光悦

旭川医科大学医学部歯科口腔外科学講座

顎骨骨髓炎は、抗生物質の発達から減少傾向にあるが、発症すると依然として難治性の疾患であり、治療が長期化することが少なくない。近年、顎骨骨髓炎の補助療法として高気圧酸素(以下HBO)療法が各施設で行われるようになってきている。今回われわれは1997年4月から2008年5月まで当科でHBO療法を行った下顎骨骨髓炎61例について臨床的検討を行ったので概要を報告する。性別は男性31例、女性30例で、初診時の年齢は23~84歳(平均55.9歳)。疾患は慢性化膿性骨髓炎が32例、慢性硬化性骨髓炎が12例、放射線性骨髓炎が17例であった。治療はHBO療法と化学療法の併用が11例、HBO療法と化学療法、外科治療の併用が50例であった。外科治療の併用例において、HBO療法は外科治療の前もしくは後に行った。HBO療法は1日1回2.0気圧60分で行い、最低で10回、最高で43回(平均22.3回)施行した。治療効果の判定は、主として臨床症状、MRI、CTを用いて行った。治療後に患部の圧痛、オトガイ神経麻痺等の症状の残存を認めた症例が10例で、HBO療法と化学療法の併用で再燃し再度HBO療法を行った症例が2例、HBO療法と化学療法、外科治療の併用で再燃し再度HBO療法を行った症例が5例であった。HBO療法は下顎骨骨髓炎の主治療の効果を高める有効な補助療法と考えられるが、その判定基準は明らかでなく、今後さらに検討が必要である。